

## 「ニュースポーツ」の形成

——日本におけるカテゴリー化の過程——

長谷川 健太郎

### はじめに

「ニュースポーツ」という言葉は、ある特定のスポーツ群を指し示す名称として、1970年代の末頃から使われ始めた和製英語である。『ニュースポーツ用語事典』の著者である野々宮徹によれば、活字媒体におけるニュースポーツ表記の初出は1979年まで遡るといふ [野々宮 2000: 226-229]。以来、30年以上が経過した今日に至るまで、この言葉は大衆メディアや行政、学術研究などの幅広い分野で使用され続けてきた。

しかし、ニュースポーツという言葉が社会で広く用いられる一方、その定義を巡っては、しばしば混乱がみられた。例えば『改訂 ニュースポーツ事典』は冒頭から「ニュースポーツとは何か。その定義を定めるのはたいへん困難なことであり、日本では、多種多様なスポーツがごちゃ混ぜにニュースポーツとして濫用されているのが現状」だと述べている [北川ほか 2000: 3]。そして更に混乱に拍車をかけているのが、ニュースポーツという字義に反して、起源の古いスポーツもニュースポーツと称されることが多々あることや、年月が経過してもニュースポーツと呼ばれ続けるケースが多い、という事実である。

こうした定義上の混乱に対して、研究者たちはニュースポーツ種目の分類、特性に基づく定義、あるいは歴史的・哲学的なアプローチによる位置づけを試みてきた。しかしながら、これらの議論は、「理念」としてのニュースポーツと実体的な「カテゴリー」としてのニュースポーツとの混同によって、依然として混乱を残している。そして、理念としてのニュースポーツに関しては通時的な研究が行われているものの [野々宮 2000; 石川 2010ほか]、カテゴリーとしてのニュースポーツを通時的に追った研究は数少ない。そこで、本稿では主に大衆雑誌メディアとニュースポーツ種目をカタログ・百科事典的に紹介した書籍とを通時的にみていくことで、ニュースポーツというカテゴリーの形成・変遷を追う。

本稿の構成は以下の通りである。第1節ではニュースポーツを巡る議論のレビューを行う。第2節では大衆雑誌メディアにおけるカテゴリーとしてのニュースポーツの変遷を追う。第3節ではニュースポーツ種目をカタログ・百科事典的に紹介した書籍、ニュースポーツ種目に関する調査報告書などを通して、ニュースポーツというカテゴリーに働きかけられた組織化・体系化の動

きを追う。以上をもって、カテゴリーとしてのニューススポーツがいかなる領域として形成されてきたのかを明らかにすることが、本稿の目的である。

## 1. ニューススポーツを巡る議論と混乱の所在

ニューススポーツを巡る議論のレビューは、野々宮による詳細な論考が既に存在しているが〔野々宮 2000: 236-258〕、本節では筆者の観点を加え、改めて簡単なまとめを行う。

1970年代の末頃から使われるようになったニューススポーツという言葉を巡っては、その定義の曖昧さ・困難さが度々指摘されてきた〔野川 1992: 10; 野々宮 2000: 211-213; 北川ほか 2000: 3; 前山 2006: 11〕。こうした定義上の混乱に対する回答の一つは、既にニューススポーツというカテゴリーに含まれていたスポーツを分類することによって、カテゴリー全体の説明を行うというものであった。例えば、通商産業省が1990年にまとめた『スポーツビジョン 21』では、ニューススポーツを「①国内外を問わず最近生まれたスポーツ、②諸外国で古くから行われていたが、最近我が国で普及してきたスポーツ、③既存のスポーツ、成熟したスポーツのルール等を簡易化したスポーツ、を包含したもの」として整理している〔通商産業省産業政策局 1990: 113-114〕。また、野川春夫も「簡易化」を「改良」と言い換え、開発型、輸入型、改良型という3分類を用いている〔野川 1992〕。更に野々宮は上記を踏まえて、より広範な定義に基づく修正3分類案を提唱している〔野々宮 2000: 241〕。

第二の回答の仕方としては、カテゴリーに含まれるスポーツの多くにみられる特性からニューススポーツ全体の特性を定義しようという試みがある。例えば、島崎仁は「一部特殊なものを除く」と前置きしつつ、ニューススポーツに共通する特徴を誰でも気軽にゲーム的な楽しみが得られる「遊戯性」に求めている〔島崎 1989〕。同様に師岡文男はニューススポーツの特徴を11点列挙し、中でも①「楽しさ」を得ることを第一に考える、②いつでも、③どこでも、④誰でもプレーできる、という4要素をニューススポーツの必須条件に挙げた〔師岡 1993〕。一方、「いつでも、どこでも、誰でも気軽にできるスポーツ」という特徴は『スポーツビジョン 21』にも取り上げられているが、同書では「かなりの専門知識、技術が伴い、しかも体力を必要とし、危険性の高いスポーツ」との二極化傾向がみられることを併せて指摘している〔通商産業省産業政策局 1990: 115〕。

第三の回答は、歴史学的な視点からニューススポーツの存在を位置づけようとする試みである。野々宮はスポーツ文化の変容の節目を1970年前後に置き、アメリカ社会のカウンター・カルチャーや、ノルウェーから西ドイツを經由して日本に持ち込まれたトリム運動をニューススポーツの源流にみている〔野々宮 2000: 211-235〕。また、上記の通史的な議論と重なりつつ、ニューススポーツを近代スポーツに対するアンチテーゼとして、更にはそれを超えるものとして位置づける議論もみられる〔早川 1992; 野々宮 2000: 236-258, 306-311; 稲垣 2001; 2006〕。これらの議論の多

くは、近代スポーツ（競技スポーツ）の特質である競争原理や記録・効率性の追求に対し、異なる原理（「適合原理」[野々宮 2000]、「共生原理」[稲垣 2006] など）に基づく新たなスポーツが立ち現われてきた、とする議論である。ゆえに、この議論は先に挙げたニュースポーツの特性に関する議論とも重なり合う部分がある。

最後に、より現実的な回答として「多種多様なスポーツがごちゃ混ぜにニュースポーツとして濫用されている」[北川ほか 2000: 3]、「これまであまり、ないしは全く、ほとんど、見たり、聞いたり、行ったりされたことのないスポーツの種目あるいはその変種類を多様に含めて指し呼んでいるようにみえる」[島崎 1989: 9] といった考え方もある。『改訂 スポーツ事典』では、「メジャーなスポーツとして広く多くの方々に周知されているスポーツか、そうでないスポーツかといった分類の仕方」もあるとして、「メジャースポーツ以外はすべてニュースポーツである」という考え方を「案外、ニュースポーツを定義づける場合、適合するものかもしれない」としている[北川ほか 2000: 6]。また、先に挙げた野川は「スポーツの進化」という観点から、ルールの整備されていないニューゲームから、ルールの制度化が進み、スポーツとして市民権を獲得するまでの過渡期としてニュースポーツを位置づけている[野川 1992: 10-11]。野川は普及とルールの制度化とを重ね合わせて捉えており、メジャーな存在になる前のスポーツをニュースポーツとしている点で、『改訂 スポーツ事典』の見方と部分的に一致するものである。

以上のようにニュースポーツを巡る議論を通覧してきたが、ニュースポーツに理念的な統一性を見出そうとする試みがある一方で「多種多様なスポーツがごちゃ混ぜになっている」と述べられているなど、依然として混乱がみられる。この混乱は、「理念」としてのニュースポーツと、実体的な「カテゴリー」としてのニュースポーツとの混同に起因しているように思われる。すなわち、ニュースポーツというカテゴリーを統合しているようにみえる理念（近代スポーツへのアンチテーゼなど）と、実体的なカテゴリー（多種多様なスポーツがごちゃ混ぜになっているなど）との間にずれがあるにも関わらず、そのずれを分節化せずに議論を進めてきたことが混乱をもたらしているのではないだろうか。

上記の観点から先行研究を眺めると、理念としてのニュースポーツの形成過程は歴史・通時的な研究が多数行われているが[野々宮 2000: 211-235; 稲垣 2001; 2006; 石川 2010: 3-35]、実体的なカテゴリーとしてニュースポーツの形成や変遷を追った研究は数少ない。よって本稿では、実体的なカテゴリーとしてのニュースポーツに焦点を合わせ、ニュースポーツというカテゴリーの変遷を通時的にみていくことにする。

## 2. 大衆雑誌におけるニュースポーツ

本節では、過去の大衆雑誌において、いかなるスポーツ種目がニュースポーツとしてカテゴライズされてきたのかを追うことによって、ニュースポーツというカテゴリーの形成・変遷をみて

いく。大衆雑誌というメディアに注目したのは、ニュースポーツという言葉が「ジャーナリズムの領域で用いられたのが最初であろうと考えられる」[野々宮2000: 226] からである。

分析データの収集にあたっては、以下の方法を取った。まず、大衆雑誌を集積している大宅壮一文庫の雑誌記事索引を元に、記事の題名に「ニュースポーツ (ニュー・スポーツ)」という単語を含む雑誌記事を収集した。続いて記事内容を確認し、1つの記事内で3種類以上のニュースポーツ種目を紹介しているものをピックアップした。3種類以上としたのは、スポーツ種目それぞれよりもニュースポーツというカテゴリー自体を強調した記事を抜き出すためである。以上の条件に適合した雑誌記事の一覧が表1である。なお、「ニュースポーツ」ではなく「新スポーツ」という表記を用いた記事4件も併せてピックアップした。

	出版年月	雑誌名	出版社	ページ	注記
1	1980年4月号	素敵な女性	婦人生活社	230-231	
2	1985年4月26日号	週刊宝石	光文社	84-89	新スポーツ
3	1985年1月号	月刊百科	平凡社	6-7	
4	1986年1月号	ショッピング	日経ホーム出版社	265-271	
5	1988年10月13日号	GORO	小学館	22-43	
6	1989年3月19日号	毎日グラフ	毎日新聞社	40-43	
7	1989年5月号	家庭画報	世界文化社	231-237	
8	1990年2月号	THE21	P H P 研究所	89-92	
9	1991年1月号	winds	日本航空文化事業センター	183	
10	1991年1月23日号	ターザン	マガジンハウス	24-27	
11	1991年7月号	花も嵐も	花嵐社	36-37	
12	1991年11月20日号	週刊朝日・増刊	朝日新聞社	26-28	
13	1991年11月27日号	ターザン	マガジンハウス	49-51	
14	1992年5月17日号	週刊読売	読売新聞社	40-43	
15	1992年12月23日号	ターザン	マガジンハウス	31	
16	1996年3月25日号	クロワッサン	マガジンハウス	77	
17	1999年12月8日号	ターザン	マガジンハウス	28-29	
18	2002年3月27日号	ターザン	マガジンハウス	90-93	
19	2003年7月26日号	サンデー毎日	毎日新聞社	157-160	
20	2007年12月号	広告	博報堂	50-53	新スポーツ
21	2008年1月号	リベラルタイム	リベラルタイム出版社	42	新スポーツ
22	2008年2月号	家の光	家の光協会	43-49	
23	2008年5月12・19日号	週刊大衆	双葉社	232-236	新スポーツ
24	2010年8月5日号	週刊新潮	新潮社	151-153	

表1：ニュースポーツ紹介雑誌記事一覧（筆者作成）

まず、表1から読み取れることは、ニュースポーツをカタログ的に紹介した記事が1980年代の半ば以降から増加し、特に1990年前後に集中して掲載されていることである。この時期に記事が集中している理由としては、1988年の文部省の機構改革（「生涯スポーツ課」の新設）と、それに伴い全国スポーツ・レクリエーション祭などのイベントが開始されたことの影響 [北川ほか2000: 8-9] を考えることができるが、断定は難しい。

続いて、これらの記事で実際にいかなるスポーツ種目が紹介されているのかをまとめたものが表2である。24の記事で通算173個、119種目のニュースポーツ種目が紹介されている。登場回数が最も多いのはディスクゴルフの9回で、1980年代から近年に至るまで一貫してニュースポーツとして紹介され続けている。なお、登場回数の上位5位までは『ニュースポーツベスト・7』[日本レクリエーション協会 1993] に紹介されている種目が占めている。また、2回以上紹介されている種目がわずか22種目なのに対し、1回のみで紹介が97種目と大半を占めている点特徴的である。紹介されている種目の中身も、ボーダー・トゥ・ボーダー（800kmを2人で走破するアメリカのローカルレース）やクラウドホッパー（1人乗りの気球）といったものから、今日ではプロチームが存在しているフットサルまで幅広い。記事の論調も「いつでも」「どこでも」「だれにでも」という側面を強調した記事（『家の光』2008年2月号）、ニュースポーツを「家族みんなで楽しむ」「どこでも手軽にできる」「道具を揃えて本格的にやる」の3種類に分けて紹介している記事（『THE21』1990年2月号）、アウトドアスポーツに挑戦する人々を「ニュースポーツの開拓者」として紹介した記事（『家庭画報』1989年5月号）など多種多様である。

以上のことからみえてくるのは、大衆雑誌上でのニュースポーツというカテゴリーは、何らかの理念や思想で統一されたカテゴリーというよりも、メジャースポーツを除く多種多様なスポーツを包摂するカテゴリーとして形成され、使用されてきたと判断する方が適切だということである。つまり、「メジャースポーツ以外はすべてニュースポーツである」[北川ほか 2000: 6] という見方が、ここでは的を射ているといえよう。ゆえに、以前から紹介されていてもメジャースポーツにならず、多くの人にとって見慣れたものにならなければ、ニュースポーツであり続けることができる（ペタンクやディスクゴルフなど）。また、同時にメジャーになる前のフットサルなども、その時点ではニュースポーツのカテゴリーの中で扱われているのである。

したがって、野々宮や板垣による、近代スポーツの原理に対抗する別の原理を持ったニュースポーツ[野々宮2000; 2001; 稲垣 2001; 2006] という図式は、実体的なカテゴリーとの間にはずれがあり、カテゴリー全体を統合する概念とはいえない。カウンター・カルチャーやトリム運動の影響、また理念的な面での近代スポーツへの対抗といった要素は決して無視できるものではないが、これらの要素はカテゴリーを統合する理念というより、カテゴリー内の一部（あるいは多く）に影響を与え、また、ニュースポーツというカテゴリー自体の形成を促してきた動因の1つとして捉える方が正しいように思われる。

### 3. ニュースポーツ種目のリスト化

続いて本節では、多種多様なスポーツを含むカテゴリーとして形成されてきたニュースポーツにおいて、種目のリスト化が進められていく流れをみていく。ニュースポーツ種目のリスト化は、カテゴリーを組織化・体系化しようとする動きとして、またニュースポーツという領域が一定の

番号	競技名	活動型	掲載雑誌 (表1参照)																								掲載回数
			1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	
1	ディスクゴルフ	ゴルフ型																									9
2	ベタンク	ボウズ型																									6
3	インディアカ	バレーボール型																									6
4	チュックボール	サッカー・ラグビー型																									6
5	シャッフルボード	ボウズ型																									5
6	ラクロス	ポロ・ホッケー型																									4
7	ハッキーサック	操作・操縦型																									4
8	セバタクロ	バレーボール型																									3
9	ホースシューズ	ターゲット型																									3
10	ローンボウルズ	ボウズ型																									3
11	カーリング	ボウズ型 氷雪域																									3
12	パラグライダー	漕・滑・飛遊型 空域																									3
13	パドルテニス	テニス・バドミントン型																									3
14	水中ホッケー※	ポロ・ホッケー型 水域																									2
15	コーフボール	バスケットボール型																									2
16	フットサル	サッカー・ラグビー型																									2
17	フリークライミング	登山・ダイビング型																									2
18	グラウンドゴルフ	ゴルフ型																									2
19	カバディ	カバディ型																									2
20	クロッケー	クロッケー・ビリヤード型																									2
21	綱引き	腕相撲・綱引き型																									2
22	バシクルポロ・マウンテンバイク	ポロ・ホッケー型																									2
23	ビーチテニス※	テニス・バドミントン型																									1
24	ヘルスバレーボール※	バレーボール型																									1
25	ディスクドッグ	操作・操縦型 動物利用																									1
26	ラート	体操競技・ダンス型																									1
27	スポーツ吹矢	ターゲット型																									1
28	トリットボール	ゴルフ型																									1
29	キンボール	バレーボール型																									1
30	スピードボール	テニス・バドミントン型																									1
31	タスポニー	テニス・バドミントン型																									1
32	バンボン	テニス・バドミントン型																									1
33	雪合戦	ドッジボール型 氷雪域																									1
34	ビリボー※	ターゲット型																									1
35	アジャタ※	ターゲット型																									1
36	フィーエルヤッペン※	走・跳・投・泳型																									1
37	囲碁ボール	ゴルフ型																									1
38	クロリティー	ターゲット型																									1
39	スカットボール	ゴルフ型																									1
40	デイスコン	ボウズ型																									1
41	バグゴ	ターゲット型																									1
42	マレットゴルフ	ゴルフ型																									1
43	ユニカール	ボウズ型																									1
44	ターゲットボール	テニス・バドミントン型																									1
45	ドッジビー	ドッジボール型																									1
46	バウンスボール	テニス・バドミントン型																									1
47	チャレンジザゲーム	総称・多種目型																									1
48	エクストリームアイロニング※	移動・踏破型																									1
49	バドボ※	漕・滑・飛遊型 水域																									1
50	トレイルライニング※	総称・多種目型																									1
51	eスポーツ※	総称・多種目型																									1
52	キャニオニング	登山・ダイビング型																									1
53	ボルダリング	登山・ダイビング型																									1
54	ボールダンス※	体操競技・ダンス型																									1
55	ジークンドー※	拳法・武術・ボクシング型																									1
56	3on3	バスケットボール型																									1
57	ビーチフットボール※	サッカー・ラグビー型																									1
58	スキムボード※	操作・操縦型																									1
59	スケートボード	走・滑型																									1
60	ブーメラン	操作・操縦型																									1

競技名・活動型は野々宮 (2000) のリストによる。リスト中に名前が無いもの (※) は筆者の判断によって分類した。

表2：雑誌記事における紹介種目一覧 (筆者作成)



場を得ていく過程としてみる事が可能である。

ニュースポーツ種目の広範なリスト化の試みは、日本余暇文化振興会が1986年から文部省の補助事業として行った『地域におけるニュー・スポーツの開発に関する調査研究』が端緒といえる。全国の市区町村教育委員会体育課に対するアンケート調査により進められたこの調査では、105種目のニュースポーツがリストアップされた〔日本余暇文化振興会 1987: 27〕。教育委員会へのアンケート調査という調査手法からうかがえるように、ここでリストアップされている種目にはマリンスポーツ、スカイスポーツに類するニュースポーツは含まれていない。また、文部省体育局長生涯スポーツ課は、1989年時点で国内で実施されている379種目のスポーツをリストアップしている。このリストはニュースポーツに限定したものではないが、文部省体育局長の機関誌『健康と体力』のニュースポーツ特集の中で報告されている〔久保1989a〕。更に行政からのアプローチとしては、通商産業省も1990年の『スポーツビジョン 21』の中で「ニュースポーツ」の振興を掲げており、①マリンスポーツ、②スカイスポーツ、③変形スポーツ、④その他の4分類のもとで22種目の「主なニュースポーツ」を列挙している〔通商産業省産業政策局 1990: 113-120〕。

一方、1980年代後半からは、日本レクリエーション協会とその関係者（北川・清水ら）が主だった著者・編者となって、ニュースポーツ種目をカタログ・百科事典的に紹介する一般書籍が複数出版されようになる（表3参照）。このうち、野々宮の『ニュースポーツ用語事典』は学術色の強いもので、983種目のニュースポーツをリストアップし分類を試みている〔野々宮 2000〕。それ以外の11冊は網羅的なリストを目指したものではないが、「ニュースポーツ」という枠組の元に数多くのスポーツを並置して紹介している点で、「ニュースポーツ」のリスト化の流れに位置づけられるものである。表3に示したカタログ・百科事典には文庫サイズ（『ニュースポーツ・ハンドブック』）から700ページを超える大著（『改訂 ニュースポーツ事典』）まで幅広いが、

年度	著者・編者	書名	種目数	団体
1984年	北川勇人（日本レクリエーション協会監修）	レクリエーションスポーツ種目全書※1	80	39団体
1986年	北川勇人（日本レクリエーション協会監修）	ニュースポーツ・ハンドブック	10	1団体
1991年	北川勇人（日本レクリエーション協会監修）	ニュースポーツ事典	96	78団体
1993年	体育施設出版	ニュースポーツ施設づくりガイドブック	36	35団体
1993年	日本レクリエーション協会	ニュースポーツベスト・7	7	7団体
1995年	清水良隆・紺野晃	ニュースポーツ百科	37	34団体
1997年	清水良隆・紺野晃	新訂版 ニュースポーツ百科	37(56)※2	34団体
1998年	インタークロス研究所	全国ユニーク競技&ニュースポーツガイド	215	
2000年	北川勇人・日本レクリエーション協会	改訂 ニュースポーツ事典	96	90団体
2000年	野々宮徹	ニュースポーツ用語事典	983	なし
2002年	自由時間デザイン研究会	ニュースポーツ100	105	99団体
2006年	前山亨	小学生熱中!ニュースポーツ事典	30(23)※3	21団体

※1：『ニュースポーツ事典』（1991）の元になった書籍だが、本書では「ニュースポーツ」という言葉は使われていない。

※2：括弧内はコラム記事による紹介種目を加えた数字。

※3：括弧内は「チャレンジ・ザ・ゲーム」を1種目として数えた場合の数字。

表3：ニュースポーツのカタログ・百科事典一覧（筆者作成）

『ニュースポーツ用語事典』を除くと下記の共通点がみられる。①比較的详细にルールや用具の解説を載せていること。②種目ごとの問い合わせ先（団体）が掲載されていること。また、全ての書籍に共通してはいないが、各項の執筆を種目団体の関係者が担当（もしくは執筆協力）しているものも多い。

また、表3に挙げた市販のニュースポーツのカタログ・百科事典を参考にして、地方行政が作成したニュースポーツ・カタログも複数、存在するようである。筆者が入手できたのは、東京都教育庁による『ニュースポーツガイドブック』（30種目・表166種目／80団体）〔東京都教育庁体育部スポーツ振興課 1992〕と、滋賀県教育委員会による『ニュースポーツルール集 第3集』（31種目／28団体）〔滋賀県教育委員会保健体育課 1996〕だけであるが、いずれも各種目の解説と問い合わせ先に加え、都・県内の普及状況を報告している。

以上の「ニュースポーツ種目のリスト化」の流れを概観すると、このリスト化は、中央官庁（文部省・通商産業省）、レクリエーション関連団体（日本レクリエーション協会・日本余暇文化振興会）、地方行政（都道府県の教育委員会）、研究者、各ニュースポーツ種目団体の関係者が協同して進めてきたものだと考えられる。また、時期的には1980年代後半が契機となっており、1988年の文部省の機構改革と全国スポーツ・レクリエーション祭の開催開始の直接的な影響がうかがえる。1988年の組織改編によって「生涯学習局」や「体育局生涯スポーツ課」が新設されて以来、文部省は日本レクリエーション協会などと協同で、全国スポーツ・レクリエーション祭を始めとする、ニュースポーツが行われる全国規模の大会を開始した〔日本レクリエーション協会 1998: 114-115; 北川ほか 2000: 8-9〕。その影響の大きさ〔仲野 2006: 362〕や、同時期に並行して進められた種目団体の組織化について〔日本レクリエーション協会 1998: 223-227〕はわずかに指摘がみられるものの、詳細な調査・研究は進められていない。今後の調査・研究が待たれる。

いずれにしても、メジャースポーツを除いた残余的なカテゴリーとして形成されてきたニュースポーツを、行政や日本レクリエーション協会が中心となって組織化・体系化しようとした動きが、1980年代後半以降のニュースポーツ種目のリスト化であったと考えられる。また、種目の概要だけでなく、問い合わせ先となる団体が繰り返しリストアップされていったことや、市区町村レベルでの普及状況が調査対象になったことからうかがえるのは、カテゴリーとしてのニュースポーツの組織化に並行して、団体や行政地域レベルでの組織化が進められていったということである。

## おわりに

最後にこれまでの議論をまとめ、今後の研究課題を示す。

第1節における先行研究のレビューでは、実体的なカテゴリーとして形成されてきたニュースポーツと、理念としてのニュースポーツとが混同されていることによって、議論に混乱が生じて

いることを示した。

第2節では、実体的なカテゴリーとしてのニュースポーツの形成を追うために、大衆雑誌の記事に着目して分析を試みた。ここで明らかになったのは、大衆メディアで使用されてきたニュースポーツというカテゴリーが、何らかの理念や思想によって統一されたものというよりも、メジャースポーツ以外のスポーツを包摂する残余的なカテゴリーとして今日まで使用されてきたということである。

第3節では、多種多様なスポーツを包摂するカテゴリーとして形成されてきたニュースポーツに対して、種目のリスト化が進められ、組織化が図られていく過程を追った。ここでは、主に出出版物資料（カタログ・百科事典など）から、文部省や日本レクリエーション協会が中心となって、種目のリスト化と団体のリスト化を進めていった過程を示した。

以上のことをまとめれば、ニュースポーツというカテゴリーは、メジャースポーツを除いた残余的なカテゴリーとして使われ続けている一方で、1980年代後半以降、行政や日本レクリエーション協会の主導により、組織化・体系化が進められてきたといえる。

今後の課題としては、第3節および結論の延長として、団体や地域行政のレベルにおける組織化に関する調査・研究が挙げられる。主に1980年代以降、さまざまなニュースポーツ種目に関する統括団体が組織化されていったが〔日本レクリエーション協会 1998: 226-227〕、各団体がいかに組織化され、今日まで至っているのか。あるいは、至らずに消滅したり、再編されたりしたのか。フィールドワークを含め、広範な調査が求められる。現在、筆者は特に「フットバッグ（ハッキーサック）」（表2のとおり1980年代末頃にはニュースポーツの1つとして紹介され、1988年に日本余暇文化振興会のバックアップのもと協会を設立したが、後に活動を休止。2004年に新たな協会が設立された）という種目に着目し、新旧の協会関係者にフィールドワーク調査を進めているところである。

さて、今日、ニュースポーツという領域が残余カテゴリーとしてのあいまいさを残しつつ、社会的に一定の場所を得たことにより、継続的に活動を続けながらニュースポーツ（≒マイナースポーツ）であり続ける道が生まれている。野川は、市民権を獲得する進化の途上にあるスポーツをニュースポーツと位置づけていたが〔野川 1992: 10-11〕、筆者が調査を進めている現在の日本フットバッグ協会を含め、必ずしも全てのニュースポーツ団体がメジャー化し、ニュースポーツを脱することを目指しているわけではない。また、ニュースポーツであり続けること（ニュースポーツとして注目を集め続けること）も簡単なことではない。メジャーになっていくこと。「ニュー」であり続けること。過去のものとして消え去っていくこと。この狭間に、「ニュースポーツ」とカテゴライズされたスポーツにまつわる要所があると、現在、筆者は考えている。

## 参考・引用文献

稲垣正浩

2001 「ニュースポーツ論議の意味」『近代スポーツの超克：ニュースポーツ・身体・気』（松本芳明・野々宮徹・高木勇夫編），叢文社，1-19.

2006 「講演録 ニュースポーツとはなにか」*Iphigenia* 7, 日本体育大学大学院体育科学研究科スポーツ文化・社会科学系稲垣正浩研究室，169-185.

インタークロス研究所

1998 『全国ユニーク競技 & ニュースポーツガイド』，インタークロス研究所.

石川幸生

2010 『クオリティーの研究：生涯スポーツとしてのニュースポーツ』，唯学書房.

北川勇人

1984 『レクリエーションスポーツ種目全書』，遊戯社.

1986 『ニュースポーツ・ハンドブック』，ベースボール・マガジン社.

1991 『ニュースポーツ事典』，遊戯社.

北川勇人・日本レクリエーション協会編著

2000 『改訂 ニュースポーツ事典』，遊戯社.

糸野豊

1989 「今、何故ニュースポーツか」『健康と体力』21(11), 文部省体育局，5-8.

久保浩二

1989a 「我が国で実施されているスポーツの現状」『健康と体力』21(11), 文部省体育局，17-24.

1989b 「ニュースポーツの紹介」『健康と体力』21(11), 文部省体育局，25-36.

清水良隆・紺野晃編

1995 『ニュースポーツ百科』，大修館書店.

1997 『新訂版 ニュースポーツ百科』，大修館書店.

滋賀県教育委員会保健体育課

1996 『ニュースポーツルール集 第3集』，滋賀県教育委員会保健体育課.

島崎仁

1989 「今、何故ニュースポーツか」『健康と体力』21(11), 文部省体育局，9-12.

自由時間デザイン研究会編著

2002 『ニュースポーツ100：豊かな自由時間デザイン 2002年版』，評言社.

体育施設出版編

1993 『ニュースポーツ施設づくりガイドブック』，体育施設出版.

通商産業省産業政策局

1990 『スポーツビジョン21：スポーツ産業研究会報告書』，通商産業調査会.

東京都教育庁体育部スポーツ振興課

1992 『ニュースポーツガイドブック』，東京都教育庁体育部スポーツ振興課.

日本余暇文化振興会

1987 『地域におけるニュー・スポーツの開発に関する調査研究』，日本余暇文化振興会.

1988 『ニュースポーツによるコミュニティの振興に関する事例研究』，日本余暇文化振興会.

1989 『ニュースポーツの振興方策及びその望ましいあり方の開発に関する研究』，日本余暇文化振興会.

日本レクリエーション協会

1993 『ニュースポーツベスト・7：生涯スポーツを楽しむために』，日本レクリエーション協会.

1998 『レクリエーション運動の五十年：日本レクリエーション協会五十年史』，日本レクリエーション協会.

仲野隆士

2006 「ニューススポーツの人口動態」『体育の科学』56(5), 日本体育学会, 361-365.

野川春夫

1992 「ニューススポーツへの招待」『体力づくり情報』9(1), 健康・体力づくり事業財団, 10-12.

野々宮徹

2000 『ニューススポーツ用語事典』, 遊戯社.

2001 「ニューススポーツ登場の背景」『近代スポーツの超克: ニューススポーツ・身体・気』(松本芳明・野々宮徹・高木勇夫編), 叢文社, 53-62.

早川武彦

1992 「『ニューススポーツ』の胎動: 新たな運動文化の登場か」『研究年報』1992, 一橋大学, 32-35.

前山亨監修

2006 『小学生熱中! ニューススポーツ事典: 体育&コミュニケーション・ワークに使える30選』, 明治図書出版.

森朗

1989 「ニューススポーツ開発の視点」『健康と体力』21(11), 文部省体育局, 9-16.

師岡文男

1993 「ニューススポーツの普及戦略: フライングディスク普及事例からの考察」『日本体育学会大会号』44(A), 日本体育学会, 92.

1996 「生涯スポーツとニューススポーツ: スポーツの原点を求めて」『ソフィア』45(2), 上智大学, 240-247.

山田力也・谷口勇一

2001 「ニューススポーツの変容過程に関する社会学的研究」『福岡大学スポーツ科学研究』31(1・2), 福岡大学研究推進部/スポーツ科学研究編集委員会編, 23-33.